臥龍が丘は緑なり

村松高校東京同窓会会報

平成14年(2002)新春号

新潟県立村松高等学校東京同窓会　No. 32

新年に思う

東京同窓会長　佐　伯　益　一　（旧中２７）

前の会報に「今年（平成13年）もまた荒れるだろう」と書いたが、世界中は大変な事になってしまった。
到る処で殺戮や爆撃が繰り返されている。なんと見るか？。テロは反対、報復も反対、と声高かに叫ばれているが世界各国の為政者は、これをどのように終結しようとしているのか、さっぱり先が見えない。原点を忘れているのではないかと感ずる。国内にも問題は多い。
私自身にも分からない。ひとりマスコミがはしゃいでいるが、これは会員各位の充分ご承知の通り、敢えて触れない。　これが新年早々の私の思いである。

さて、母校創立９０周年の記念行事も一先ず終った。今後、東京同窓会の発展について如何ようにして進めて行こうかの問題である。お互いに限られた人生を楽しみ意義あるものにするため、役員は一生懸命頑張っている
同窓各位にはこれに応えて頂きたいと願っている。
前にも書いたが人間一人ひとりが交流を深めれば紛争は起きない筈。今年も楽しく生きようではありませんか。
めでたいような、めでたくないような新年を迎えたが無事越年されたことを喜び、変な記述になったが新年のご挨拶に代えたいと思う次第。

母校創立９０周年記念式典に出席して

母校の創立９０周年記念式典が１０月２８日午前9時４０分より母校屋内運動場で開催され出席してきた。
東京同窓会からの出席は、私と深見、塚田両常任幹事の三人で、その他東京会員の出席者も多く見られた。
そこで、ある程度私の感想も交え、概略を報告する。
壇上中央に国旗が掲げられていた事には一先ず安堵したが国歌・校歌の斉唱には全般に声が小さいなと感じた。
校長式辞、実行委員長挨拶、来賓祝辞は何れも似たり寄ったりの内容で祝詞の棒読みであったが、たゞ五十嵐五泉市長が原稿なしで坦々と祝辞を述べられたことが印象に残った。生徒会長による「喜びの言葉」は、めり張りのきいた聊か語尾上りの発言であったが語尾がしっかかりしていて、これは聞かせた。
始めは男子生徒かなと思ったが女子生徒であった。
記念講演は母校同窓の新潟大学教授・医博の杉本英夫氏（高１２回卒）の「スポーツで出会った人たちから学んだこと」と題する約一時間に亘る講演で、内容も中々良かった。聞けば、この講演のために十五ケ月間の準備を要したという。途中、私は旧スキー場と赤山の写真撮影のため中座したが、あとで深見さんに要旨を聞いたら概略次の如しということで紹介しておきたい。

１、人生の目標を定めること。
２、現在の自分が、定めた目標に到達するための正し状態にあるか、節目節目でチェックすること。
３、その目標達成のために、なすべき事を楽しんでやる。要するに、何事も嫌々ではなく、苦しむのでもなく、おもしろがって遊び心をもって行う。
　　気付いたら、到達している。

以上はいずれ記念誌に掲載、報告されるであろうからここで筆を停める。
私は旧スキー場跡を捜して散々歩き回ったが、母校前の道は民家が両側にギッシリと建つていて分らなかった
近くに居たご婦人に訊ねたがやはり分からぬと言う。
そして　家に入ったと思ったら今度は母親らしき人が出て来た。「あゝ、その場所は此処ですよ」と教えてくれた。学校の伊藤ヒサさんのお家の近くである。昔の面影は全然ない。杉や雑木が鬱蒼と茂っているのみである。
「この小道が頂上へ行く道です、尾根から反対側が見えます。下ってくると丁度、学校前に出ます。１５分位ですかね」とも教えてくれた。礼を言って別れた。これですべて納得、長年の胸のつかえがおりた気がした。
バスに分乗、祝賀会会場のサクランド会館に行く。
玄関に着いて私は「おゃ？」と思った。どうやら私は、サクランド温泉と同じと勘違いしていたらしい。そしてなんと紛らわしい名だなと思った。会場では十数人の人から声をかけられた。懐かしく、また嬉しく思った。
特に定めたアトラクションはなかったが始めのテープカットは出席者の目を驚かせ、村松合唱団の記念歌「百年へ」の合唱は感動を呼んだが、説明が欲しかった。
祝賀の宴は賑やかな内に午後３時、万歳三唱でもって恙なく終了。誘われて二次会は深見さん共に「木むら」へ、個々雑談に終始したのは何時もの通り。
あとは徳橋、吉川、元校長さんに誘われカラオケへ、一曲軽く流して後は深見さん設定の往年のマドンナこと佐藤静子さん宅へ泊めて頂き、深夜まで村松の色々な史実等を教わった、翌日二人は無事ご帰還となる。
今回の記念式典及び祝賀会の出席者は名簿によれば、２３９名であるが、欠席者も多く祝賀会では１８０名位来賓、旧現職員を除くと同窓生は１００名位と推定した各地区支部長も出席されていることから名簿には役職名を記載した方がよかったのではないかと思った。
私は知らぬ間に実行委員にさせられていたが他の実行委員の方々のご努力、活動には心から感謝の意を捧げたい。７０年、８０年、９０年と3回、出席したが、私の旧中５年の時が３０周年の年であった。今回の９０年がめでたく終ったことは嬉しいこと。後は１００周年か。

東京同窓会・第44回大会報告

村松高校東京同窓会第４４回大会は６月３日（土）、ＪＲ山手線大崎駅東口前のホテル　ニューオータニ・イントーキョーに於いて、村松から同窓会会長・伊藤淳一氏、母校の杉原雅昭校長を迎え総勢９６名の出席で盛大に開催された。

午後２時、大会実行委員長の伊藤勇五（旧中３３）副会長の開会挨拶の後、定時総会に入り平成１２年度事業ならびに会計報告があり、いずれも承認された。

佐伯会長の「同窓会はクラス会・同期会の横の繋がりと先輩・後輩の縦の交流があって強い組織が出来る。今、村松では町村合併や高校統廃合の噂もある。村松の名が消えないよう我々も頑張らなければならない」と挨拶。

来賓の挨拶では、伊藤同窓会会長から生徒の進学状況と母校創立９０周年記念事業に対し、東京同窓会の大いなる協力を要請された。杉原校長は生徒のクラブ活動は県内において優秀な成績で、その活躍も大なるものがある。と母校の現況報告をもって挨拶に代えられた。

懇親会は、黒井伊作氏（旧中２６）の乾杯音頭で賑やかにスタート。ビクターの杉幸子さん（高２１）の演歌で会場は華やかな雰囲気。佐渡おけさ、相川音頭の踊りに続き、恒例の篠川恒夫氏（高２）の名調子による司会で「会員持ち寄りの景品・抽選会」で盛り上がり、校歌応援歌に陶酔しているうちにお開きの時間となった。

（大会実行委員会・記）

村松高校東京同窓会　第４４回大会収支決算書

平成１３年６月３日　於：ニューオータニ・イントウキョウ　　新潟県立村松高等学校　東京同窓会

収入の部　（単位：円）		支出の部　（単位：円）	
①　会員懇親会費	８２２，０００	①　準備会議費	１３，５０３
男子　55名　@10,000　＝　550,000		会議費　11,103	
女子　34名　@ 8,000　＝　272,000		通信費　2,400	
計　８９名		②　印　刷　費	２，１８０
②　祝　儀	３０，０００	印刷費　2,180	
同窓会本部　２名　20,000		③　通　信　費	５２，１００
鹿瀬おけさ会　10,000		案内状送付用切手　32,000	
③　その他の収入	２０，０００	返信用ハガキ　20,100	
二次会残金　20,000		④　送　料　（宅配便、会場宛）	２，５４０
		⑤　懇親会費　96名　@　7,000	６７２，０００
		⑥　来賓対応費	７，２５０
※　プレゼント交換抽選会には男子１６名女子１８名、計３４名の方から提供がありました。		⑦　謝　礼	６０，０００
		演歌出演　50,000	
		おけさ会出演　10,000	
		⑧　交　通　費　（備品運搬）	６，１００
		⑨　雑　費　（写真代、雑品）	２，７４８
合　計	８７２，０００	合　計	８１８，４２１
		差し引き残額　（一般会計に繰入れ）	５３，５７９
総　計	８７２，０００	総　計	８７２，０００

※　当日の１３年度会費納入者名及び、寄付金納入者名は、会報第３３号に一括して掲載します。

東京同窓会・佐伯会長の挨拶

アトラクション…おけさ会の皆さん

第４４回・東京同窓会出席者名簿

平成１３年６月２日（土）　ニューオータニ・イン・トーキョー

村松高校東京同窓会

来賓（２名）	旧中学校（８名）		高校男子（４７名）		高校　男子		高校女子（２９名）	
同窓会　会長	２６	黒井　伊作	０２	青木　猛	０９	石黒　四郎	０３	佐藤　八重
伊藤　淳一　様	２６	武藤　三郎	０２	杵渕　政海	０９	熊倉　富次	０３	白石　キヨ
			０２	篠川　恒夫	０９	増田　訓英	０３	大塲　エミ
	２７	吉田　公男	０２	粱取　正通	０９	間藤　譲一	０５	向山　律子
村松高校　校長	２７	佐伯　益一					０７	深見　洋子
			０３	亀山　知明	１０	大橋　貞夫		
杉原　雅昭　様	３０	五十嵐一郎	０３	渡辺　八郎	１０	新保　優	０８	新井　久代
					１０	関谷　雄三	０８	岡部　ユキ
	３３	伊藤　勇五	０４	加藤　清治	１０	高岡　雄三	０８	緒方美恵子
	３３	斉藤　和男	０４	下野　文幹	１０	鶴巻　浩	０８	片柳　ムツ
	３３	加藤三代太	０４	鈴木　健司			０８	木村　孝子
			０４	鈴木多喜男	１２	笠原　久	０８	久我　マキ
おけさ会　４名　様			０４	羽賀　道信	１２	佐々木秀三	０８	波多ミサエ
			０５	新井　康夫	１３	武藤　正昭	０９	大竹　和子
			０５	金子　鶴男			０９	黒川　睦子
	旧女学校　（５名）		０５	雲村　俊慥	１４	山田　俊治	０９	高岩美江子
			０５	山崎　豊吉			０９	樋口　綾子
	２５	一氏　愛子			１８	青木　敏和	０９	升本　久子
		岡本　和子	０６	佐久間英輔	１８	岡　靖	０９	松本　知子
		佐藤　治	０６	沢出　赳允	１８	笠原　静夫	０９	八巻マサ子
		佐藤　玲子			１８	斉藤　正義		
		鈴木　節子	０７	遠藤　昭	１８	佐々木秀和	１０	小島　典子
			０７	長谷川洋太	１８	高岡　英治	１０	真水　道子
			０７	八木又一郎				
			０７	梁取　錦二	２１	佐藤　克	１２	近藤　燦子
							１２	高岡五百子
			０８	小出　博三			１２	徳永　道子
			０８	鈴木　輝雄			１２	中島　和子
			０８	関塚　豪			１２	渡辺　厚子
			０８	塚田　勝				
			０８	山崎　輝雄			１４	斉藤　弘子
			０８	吉井　清			２０	安達　繁子
							２１	小沢　幸子

声高らかに応援歌を歌う

閉会挨拶…岡本副会長

抽選会・景品寄贈された方々（敬称略）

武藤　三郎（中２６）　佐伯　益一（中２７）　伊藤　勇五（中３３）　斉藤　和男（中３３）
青木　猛　（高　２）　篠川　恒夫（高　２）　鈴木　健司（高　４）　沢出　赳允（高　６）
塚田　勝　（高　８）　石黒　四郎（高　９）　増田　訓英（高　９）　大橋　貞夫（高１０）
笠原　久　（高１２）　佐々木秀三（高１２）　青木　敏和（高１８）　佐藤　克　（高２１）

岡本　和子（女２５）　佐藤　玲子（女２５）　鈴木　節子（女２５）　向山　律子（高　５）
深見　洋子（高　７）　片柳　ムツ（高　８）　木村　孝子（高　８）　黒川　睦子（高　９）
高岩美江子（高　９）　樋口　綾子（高　９）　升本　久子（高　９）　松本　知子（高　９）
八巻マサ子（高　９）　小島　典子（高１０）　真水　道子（高１０）　近藤　燦子（高１２）
徳永　道子（高１２）　渡辺　厚子（高１２）

◎　ご協力ありがとうございました　。

◎なお、当日受付混雑のため記載もれありましたらお詫び申しあげます。悪しからずご了承下さい。

平成１４年度　東京同窓会開催のお知らせ

村松高校東京同窓会第４５回大会

月　日　14年6月8日（土）

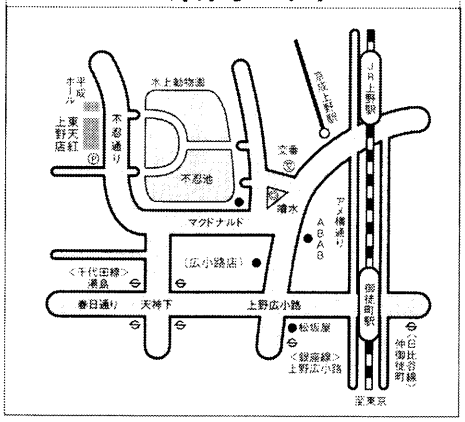
時　間　12時より（正午）

会　場　東天紅・上野店

住　所　台東区池の端１－４－３３
（上野不忍池畔）

電話番号　０３－３８２８－５１１１

ご案内地図



交　通

ＪＲ・御徒町駅	徒歩１０分
京成線・京成上野駅	徒歩１０分
地下鉄千代田線・湯島駅	徒歩　３分
地下鉄銀座線・上野広小路駅	徒歩１０分

お便りの中から

順不同：敬称略

同窓会長　伊藤　淳一（旧中３３）

先般は東京同窓会にお招きいただき、ありがとうございました。大変なご盛会で会長さんはじめ役員の方々のご努力が偲ばれました。また　県人会九十年史、お土産などありがとうございました。募金が低調でございますので、これから総力を挙げて最後をがんばりますのでよろしくお願い致します。

母校・校長　　杉原　雅昭

益々ご清栄のことと存じます。過日の東京同窓会では大変お世話になり、ありがとうございました。
また　お土産まで頂戴し恐縮しております。九十周年の記念体育祭も大成功のうちに無事終えることができ喜んでいるところです。秋の式典に向け雰囲気を盛り上げて取り組んでゆきたいと考えております。今後共よろしくお願い申し上げます。

同窓会副会長　渡辺　照男（旧中３１）

「臥龍が丘は緑なり」３１号をお送りくださいまして有り難うございました。昨年、お邪魔させて頂きましたので東京同窓会の会長様はじめ会員の皆様方の心意気が伝わって参ります。羨やましく楽しく拝見致しました。

新潟市支部はこの２９日（６月）に役員会、来月に総会と数年ぶりに動き出されます。また新津支部、五泉支部も４～５年動きがなかった様子でありましたが、会合を持つて、ようやく村松高校同窓会として実のある活動が期待出来ると喜んでおります。それに比べ、本部として、やることが、やっていることが、これで良いのか、と考えさせられている昨今であります。

創立９０周年記念行事はようやく軌道にのり各委員会が活発に動き始めました。前回と比べまして大きく変わりましたのは、建物の新設、校門、校庭の整備については県教育委員会よりきつく差し止められて出来ません。
……何を目玉にするのか……との批判が聞かれますが、全県の高校同様あきらめる外ございません。
私どものやれるだけでも頑張ろうと申し合わせ、取組んでおります。今後ともよろしくご指導の程をお願い申し上げます。

五泉・安勝寺　　田中　正往（高２５）

先日　津川の村山様（村山家司・旧中27、6/20死去）宅へお悔やみに行って参りました。在りし日の面影を思い起こし、…またお一人…と感無量でございました。
ご自愛の程を。

杵渕　政海（高２）

いつも会報を楽しく読ませていただいております。特に「ちょっと・いい話」は中々面白い。教えられることが、たくさんあります。是非いつまでも続けて頂きたいと願っております。（談）

新潟県人会広報委員　市川　昭二

凛とした題字！「臥龍が丘は緑なり」３１号を頂戴いたしました。厚く御礼を申し上げます。年２回の発行を続けられてることに敬意を表します。

私の長男・俊（たかし）と同じ字の女性の名を４頁の高校女子の部に見出し「ホッ　ー」と思いました。
硬派の佐伯会長さんの中学時代の、つけ文の話や、煙草にまつわる車中での妙令なご婦人とのやりとり、そのギゴチなさが目に浮かぶようで微笑ましく感じました。
「父が付けた犬の名前」いいお話で引きつけられました

立派な会報ですね。貴会の益々のご発展をお祈り申しあげます。取り急ぎ御礼のご挨拶まで。

在・五泉市　石川　雄二（高２）

この度　東京の個展に際しまして絶大なるご支援を戴き大変有り難うございました。お陰様をもちまして盛況の内に無事終了することが出来ました。これも偏に皆様方のご支援の賜物と深く感謝いたしております。その折りの写真が出来ましたのでお送りさせていただきます。今後とも宜しくお願い申し上げます。（一水会々員）

ちょっといい話

米・百俵は　……　６トン
北朝鮮への支援米は　…　６０万トン

はて？　……　さて？

※　米・百俵の送り主は、長岡藩の分藩であった三根山藩（今の西蒲原郡・巻町）で当時長岡藩の大参事であった小林虎三郎が藩士の反対を押しきり換金の上、学校建設資金に回した。
長岡藩は戊辰戦争（または北越戦争という）に敗れ、七万四千石から二万三千石に格下げとなり藩財政は極めて窮乏していた。
※　１０月３日付産経新聞朝刊は「米百俵」の精神を行政にと題して、これと同様の記事を掲載して巻町を紹介していた。　（伯）

旧中26回・同期会
（昭和１６年卒業）

武藤　三郎（中２６）

６月５日（火）午後３時半、村上市の瀬波温泉・大清のロビーに、１７名の同期の友が参集した。

卒業以来の初参加者は東京から和泉君、地元安田町の山口君の姿があり、６０年ぶりの再会に感動し、代わる代わる語り合う光景には、温かい友情が満ち溢れていた。

恒例の記念写真は旅館の玄関をバックに撮ってもらったが、白髪童顔が進む容姿をうまく捉えているようだ。

海岸沿いにあるこの旅館は、日本海に沈む美しい夕日が総べての部屋から眺められ、旅の情緒に独特の味わいを添えてくれると聞いていが、当日は生憎の曇り空で期待した風景に出会えなかったのは唯一の心残りであった。

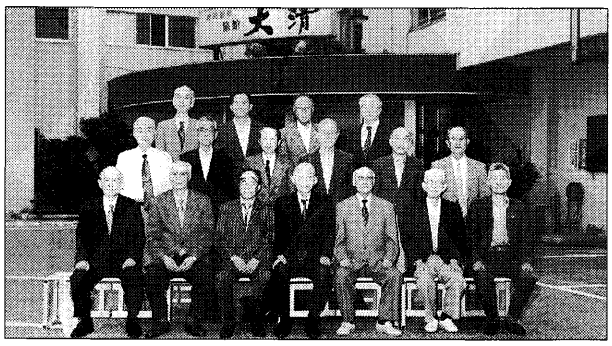
大浴場にゆっくりと浸ったあと、６時過ぎから大広間で、豪華な料理を前にして宴会が始まった。お互い歳を取ったせいか酒豪はめっきり減ったようだし、昔のように馬鹿騒ぎを演じる人もなく、まさに浅酌低唱、専ら豊富な話題で歓談を楽しんだ。この年齢を迎えての再会で更に誼みを深められる喜びに酔っているようであった。

数年前までは宴会を盛り上げるのに、コンパニオンが同席したこともあったが、今では『無くて良きものは、女と香の物…移り香厭う老いの身なれば』と江戸時代のある奉行が詠んだという歌を、何かの本で見たのを思い出し、苦笑しながらもお互いの来し方、人生の懐古談に花が咲くひと時は本当に楽しそうだった。一期一会というが、今回の出会いは人生の残り少なくなった我々にとって本当に貴重な一瞬であった思いがしてならない。

欠席者の便りの中には、体調を崩して療養中とか都合が付かない人もいたが、来年こそ一人でも多くの同期が集いあえるよう念願するばかりである。

今回は、新発田の近藤君が主幹事として苦労を重ねての開催であった。心から感謝を捧げたい。

来年は、五泉在住の窪田・田沢の両君らが幹事を快諾してくれたが、その企画を今から楽しみにしている。
お互い健康維持に最善を尽くして共に参加出来るよう、日々心がけて過ごしたいものである。



旧制村松中学第２６回生同級会 於 瀬波温泉 旅館 大清　平成13年8月5日

旧中30回（5年組）同期会

五十嵐一郎（中３０）

６月１３日、東京駅１２時発・あさひ３１７号に乗り込んだ同級生５名、いずれも村松高校東京同窓会や赤山会で顔なじみの連中である。初めての咲花温泉１泊の同級会のせいか、車中の話も弾みアッという間に新潟駅に到着した。

終戦の年の３月、私ども５年組は４年制の皆と一緒に勤労動員先である横須賀の旧海軍航空技術廠で、形ばかりの卒業式をあげたような覚えがある。碌に勉強もしなかった代わり、いろんな勤労動員先でそれなりの知識を身につけたような気がする。

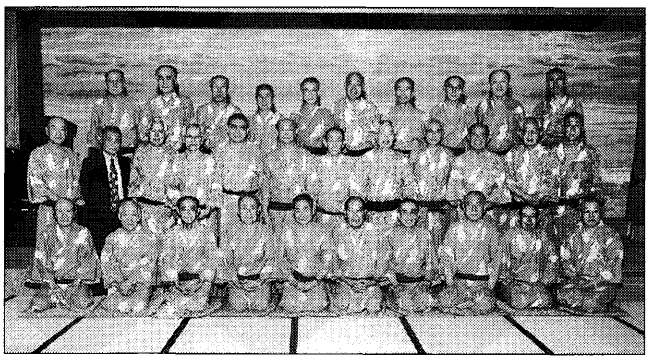
戦中・戦後を必死に生き抜いて来たせいもあるのか、なぜか私どもの同級会は地味で、一年おきに村松と五泉の地元で日帰りで開かれてきた。あと三、四年で喜寿を迎える年になったせいか、幹事のお骨折で今回の一泊旅行が実現したのである。

五泉駅で咲花温泉『佐取館』出迎えのバスを待つこと暫し、村松の連中を乗せたバスがやって来た。やがて五泉地区の連中も乗り込んで、お互い「やぁ～ヤァ！」と挨拶を交わし、５６年前に時計の針を戻し、さっそく同級会が始まった感がする。

旅館に着いて直ぐさま一風呂浴び宴会となったが、まず物故者に黙祷…同級生１２６名のうち、物故者は既に４１名、欠席者５３名、元気で参加出来た人は３２名である。あまり口には出さぬが、健康に感謝し『残された人生、大事に生きようぜ』という心境ではないのか。

新潟から来たという美形のコンパニオンに酒を勧められ皆ご機嫌になり、最後は旧校歌、応援歌の大合唱でお開きとなった。

翌日は生憎の雨で、眼下に煙る阿賀野川を眺めながら朝風呂に浸り、朝食に出されたビールを飲んで再びご機嫌となる。二年後の同級会は越後湯沢で開くことに決まり、東京地区の連中も世話役をやれという事になったが宣なるかな。同級会が始まって以来いつも世話をやいてくれる五泉・村松の幹事の衆に感謝の意を表し、それぞれ帰途についた。



旧制村松中学校30回卒［5年組］　同級会　H.13.6.13　咲花温泉佐取館

年ニモ負ケズ・酒ニモ負ケズ　旧中27回　同期会

ワタシタチガ　旧村松中学ニ入学シタノガ昭和１２年４月デ、甲乙二組編成デ１０２名デシタ。ソシテ１７年ニ卒業シマシタガ、ソノ時ハ８４名デシタ。転校、死亡マタハ軍隊志願ナドガアッタタメデス。上カラ下ッテ来ル者アリ、原級ニ留マル者モ居リマシタ。成績ノ判定ガ厳シカッタノデスネ。現在ハ所在ノ知レテイル者約３０名デスガ何レモ体ノ何処カニ病気ヤ疾患ヲ持ッテイマス

他ノ人ハ殆ンドガ死亡シテイマス。戦死者ハ、ゴク僅カデスガ、モウ７７才デ喜寿ヲ超エテイルンデスカラネ

ムリモアリマセン。ワタシタチ同期生ハ卒業以来、数ハ覚エテイマセンガ何十回トナク会合ヲ開イテイマス。一泊ノ同期会ハ毎年開キマス。モウ１３回ニナリマス。ソレダケ団結ガ固イト言エルノデハナイデショウカ。

ソコデ今年ノ同期会ハ　１１月１２日　五泉地区が幹事トナリ、所ハ湯田上温泉「わか竹」デ開催サレマシタ集マル人は今年ハ少ナク僅カ９名デシタガ欠席者ハ夫々他ノ会合ト重複シタリ、勤務ノ関係、奥サンノ病気、体調不良ナドガ理由デ毎年ノ常連ガ少ク、チョット寂シカッタノデスガソレデモ意気軒昂、芸者衆３人ヲ加ヘ例年ノ如ク大イニ飲ミ、歌イ、喋リ、踊リ、芸者衆ノ時間モ延長スルハメトナリマシタ。常連々中ガ加ワレバ次回ハ２０人近クニナル筈デス。ソレ以上ハ無理デスナ。

朝モマタ飲ム。送リ迎エハ宿ノバスデ新津～宿ノ往復途中デ田上町ノ豪農・田巻邸ノ椿寿荘ヘ立チ寄リマシタ北方博物館ノ豪農ノ館ヨリハ規模ハ小サイノデスガ中々見事ナモノデス。一見ノ価値アリト思イマスノデ湯田上温泉ヘ行カレタ折ニハ是非御覧ニナルコトヲオ薦メ致シマス。帰リニハ中野邸ヘ行キマシタ。此処デハ色々ナ古文書ヲ見ルコトガ出来マシタ。歴史ノ好キナ私ニハ大変タメニナリマシタ。

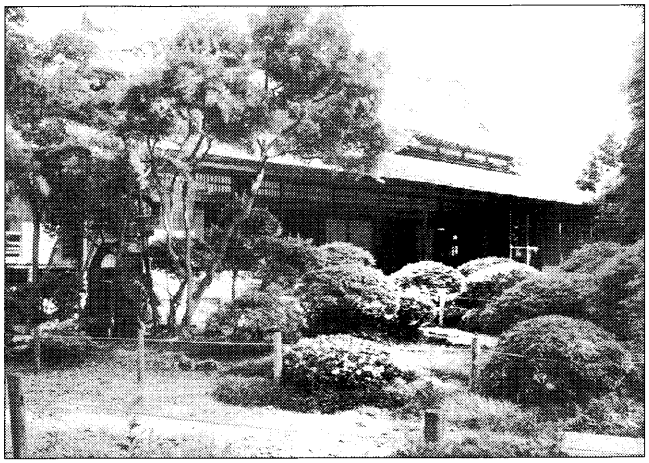
昼飯ハ新津ノ「新森」デ、此処デモマタ飲ミマシタ。午後１時半、解散、私ハ「きりん山温泉」ノ実家ヘ、コノ晩モ、マタ飲ムコトニナリマシタ。

「わか竹」ト「福泉」トハ多少ノ縁ガアリマス。精々ゴ利用クダサイ。サービスモ満点、若女将モ、キレイ。

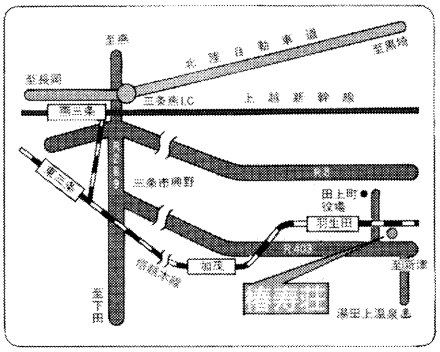
ソレニシテモ、ワタクシドモノ仲間ハドウシテコンナニ酒好キナノカ？、酒デ、ウブ湯ヲ使ッタノデハナイカト思ウクライ。年ニモ負ケズ・酒ニモ負ケズ順調ニ老イテ行コウト思ウシダイデアリマス。

コノ度ノ幹事ヲ務メタ　ニ平、竹谷両君ニ厚イ感謝ノ意ヲ捧ゲマス。ソウソウ、次ノ同期会ハ村松地区ガ幹事トナリマス。何処ニ設営スルノカ楽シミデス。

２００２年ハ、ドンナ年ニナルカ分ラヌガ同期諸氏、常ニ健在ナレト祈ルノミデアリマス。　（佐　伯　記）



田巻邸 別邸



戦争中の青春時代

林　寛（旧中３０）

私達が中学校へ入学したのが、大東亜戦争が勃発した昭和１６年であった。卒業は５年制のところ戦争のため一年短縮されて、私達四年生は、昭和２０年３月に四年生と五年生が一緒に卒業という異例の事になった。

戦争が激化するにつれ、三年・四年生になると、陸・海軍関係の学校へ、或いは海軍飛行予科練習生にと続々と志願して行った。

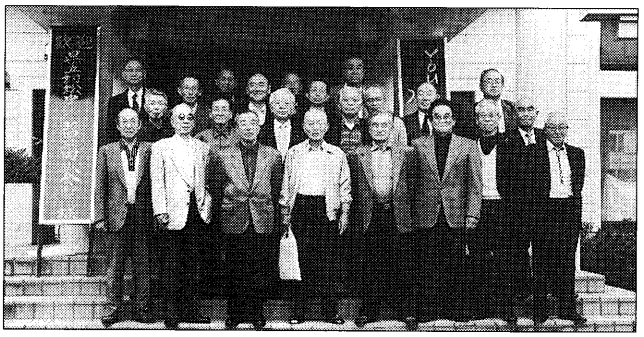
昭和１９年８月に四・五年生が、横浜の日産自動車工場へ学徒動員で出発した。しかし間もなく寮で食中毒が発生し、Ｋ君が急逝するという悲しい事件が起きた。このことを心配した父兄達がその筋に働きかけ、お陰で横須賀海軍航空技術廠へ配置換えになった。

ここは食事は良かったが、海軍直轄で毎日のようにビンタをもらう厳しい生活であった。仕事は極秘特攻兵器造りで、二十四時間三交替の旋盤作業に取組み頑張った。

昭和２０年３月、工場で卒業式を行ったが卒業の喜びや感激は全くなかった。翌日からまた特攻兵器造りの仕事が始まった。しかし戦局はますます悪化し遂に、８月１５日に終戦となった。私達の中学時代は、将に戦争に始まり終戦で終わった苦難の青春時代であった。

この度も、お互いに健康で同級会に出席できた喜びを噛みしめ合った。入学の時、３クラスで１５０名だったのが、残念なことに５５名が他界してしまった。

来年もまた健康で同級会で会おうと誓い合って別れた。



村松中学校　３０回卒同級会　（於）ホテル三川　H13.10.14～15

情詩二題

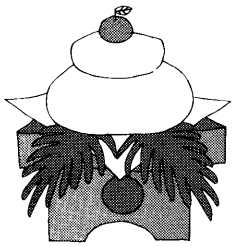
伊藤　勇五（旧中三十三回）

「村松旅情」

ちぎれ雲　風光る　早出の辺り
水温む　細流に　春の陽が躍る
見晴かす　桜なみ　愛宕を染めて
　揺れる日盛り　花かげ麗
夢誘う　桜藩　村松旅情

虫すだく　日枝の森　城址は晴れて
雲の峰　湧く彼方　白山は遥か
見晴かす　銀杏なみ　彩まだ浅く
　辿る幽境　滝谷の並木
慈光寺の　鉦かすか　村松旅情

鍾乳洞　山粧う　大沢峠
爽秋の　茜ね雲　蒲原の沃野
見晴かす　甍なみ　入り陽に映えて
　訛ふと聞く　雁木の大路
暮れて行く　城下町　村松旅情



「城山慕情」

常浪の川淀に　静かな影落し
あの頃をその儘に　昏れ行く城山よ
　毎朝通学の　汽車を待ち合わせ
　今日も遅いから　少し急ごうと
　河原の細道を　君と走ったね
　あゝ　遠い思い出
今ひとり佇んで　秘かに名を呼べば
夕風のそよぐ岸　川瀬の音かなし
週末の帰り道　登った城山は
梢から降る様に　日差しが洩れていた
　社の軒かげに　肩を寄せながら
　誰より好きだよと　そっと云った時
　わたしも同じよと　君は答えたね
　あゝ　淡い初恋
今ひとり佇んで　秘かに名を呼べば
夢残る山麓　朧に暮れて行く

村を発つ別れの日　見舞った病院の
窓越しに城山が　夕陽に映えていた
　この次帰るまで　きっと治くなるわ
　送って行けなくて　ご免なさいねと
　切なく手を握り　君は泣いてたね
　あゝ　慕る愛しさ
今ひとり佇んで　秘かに名を呼べば
闇を増す山の端に　ほのかな月の顔

（註）　城山…麒麟山
　　常浪…常浪川

「臥龍が丘」とは？

佐伯益一

松高東京同窓会々報「臥龍が丘は緑なり」の題名は会報（№２１）にも紹介したことがあるが、これは私が前から書きためておいた雑文を何時か纏めて自費出版でもする時の題名にと考えていたものである。、然し中々それも実現せず、むしろ同窓会報誌に使ったら如何かと編集会議で提案した所…良い名前…と云う事でそのまゝ採用され、現在に至っているものである。

だが　中学時代には全然関心もなく、ただ漠然と長年教えられるまゝに歌い、書いてきた「臥龍が丘」とは、いったい何だろうと、最近考えるようになってきた。もちろん「臥龍」の意味も、その場所も大体は知っているつもりであるが、どうも釈然としない。「臥龍が丘」とは誰が、いつ頃、名付けたものか？　地図にも無い。

ではひとつ　解明してみょうと挑戦する気になった。色々と調べてみたが、やっぱり分からない。役員会の時「オレは今、こんな事を考えている、協力してほしい」と訴えたところ役員諸氏の動きは誠に早く、すかさず在町の旧友・知人に連絡を取り調査を依頼してくれた。

その結果、数日を経ずして多くの資料や意見書を送って頂いた。有難く感謝すると共に反応の速さにも驚いた「臥龍が丘」関係以外の資料も多く頂いたが誌面の都合上「臥龍が丘」のみを取り上げ、他は別の機会に譲ることとし、以下それに基づいて重複する所は整理し、私見も交えながら述べてゆくこととした。

（一）臥龍が丘　……　伊藤　正　　（中３２回卒）

中蒲原郡誌の村松町誌第四章名勝古跡の三、諸山翠色欲滴の項に、最も景色の良い所は愛宕山、本堂山、臥龍山とあり、村松藩の儒者加藤北溟の詩が載っている。

「臥龍山」と題して

東山未擬臥煙霞　　丘壑放情春色新
遥見千峯雲樹裏　　不知何處謝家花

北溟は文政二年の没であるから臥龍山の名称は江戸時代からあった事は確かである。住吉神社境内にある掘岬陰の碑に「葬邑臥龍山」の文字が刻まれているのは、これが一般的な称呼であったことを物語っている。

臥龍とは、まさに昇天を期して雲雨を待つ龍の姿である。村松中学校、村松高校のみならず、藩政時代から雄飛を志す若者の象徴とされてきた由緒ある名称であることを誇りとしたい。

（二）臥龍が丘　……　森山　宥　　（中２６回卒）

大正三年七月、県知事・坂仲輔は県下の各町村に夫々大正十年を完了期限とした「町村是」の設定を命じて、「村松町是」は大正八年五月に完結した。

「村松町是」によれば「臥龍が丘」の記事はない。
臥龍が丘は「臥龍山」のことではあるまいか。
町是に記載されている山岳は（イ）愛宕山（ロ）地蔵山（ハ）臥龍山（ニ）柄木戸山（ホ）本堂山（へ）番坂　。の山々である。関係部分のロ、ハ、ニ、について述べる

（ロ）地蔵山…愛宕山の南にあり、東は半兵衛山に接し西は太子山に連なりて一帯の山脈をなす。標高７５．３ｍ、満山松樹鬱蒼として秋季松茸を産す。
太子山は普通、赭(ｱｶ)山と称し南麓に地蔵堂（今は撤廃されている）があり、刑場があった。この刑場は文化十一年(1814)のいわゆる全藩一揆の主謀者二人を処刑した特別な刑場であって地蔵山の名の起因した理由である。

（ハ）臥龍山…元・山王山、裏山とも称し地蔵山の南西にあり、標高８４．２ｍ、南方柄木戸山に連接す。

この名は村松藩の故地、村上藩の城のある臥牛山の名を似せて名付けられたものとも伝えられている。
元・山王山とはこの山上に日枝神社を祀ったことに起因する。日枝神社は祭神を山王権現と云い、村松町の日枝神社は当初、正円寺の鬼門の方角にある山王山上に祀ってあったが弘化二年(1845)藩主・直央（9 代）が寺町の旧歯骨堂山、現在の山王山に新社殿を建立、引き移したものである。

（ニ）柄木戸山…臥龍山の南にあり標高１０５ｍにして西に太子山脈を分岐し十全村との境界を画す。

地蔵山（赭山）と臥龍山との間、深沢の近くの焼堤の東に標高６７．２ｍの小山がある。その山の端が４３.４ｍ、母校の陸上グランド面が３６.1ｍ，緩やかではあるが丘陵を形成している。「臥龍が丘」については定かでないが、もしかすると？と、私なりの考察を加える。

昭和六年十月二十五日　母校創立二十周年記念式の折学友会誌第十九号から誌名を「臥龍」と定めたが戦時下のため１６年創立三十周年記念号をもって停刊となる。
「臥龍が丘」の命名は何時、誰が、何処を指して名づけたかは不明である。だが　前述の故事来歴と地理的自然景観等、山紫水明の地に質実剛健を旨とした有為の人材育成の象徴として臥龍の故事、町是にある臥龍山、起伏のない小山の端から校地に伸びるなだらかな丘陵、特に校地の辺りを指して「臥龍が丘」と命名されたのではあるまいか。臥龍健児の意気込みは応援歌によって伺い知れるが、旧中学校々歌には臥龍の文字はない。
※臥龍は「ガリョウ」で「ガリュウ」は慣用音である。

臥龍は天にも勢いや能力を持ちながら、じーっと横になって寝ている龍のことで、中国の三国時代の蜀の諸葛孔明をそれに例えたと云われている。英雄のいまだ事を挙げるざるの喩えと辞典にあるが、何時の日にか時期を得て天下に活躍することとなる。

（三）スキー場と「あか山」

母校のグランド南西、道を隔てゝ小高い丘があった。道に面して段々になった小さな茶畑があり冬季になると其処から上方に向けて学校のスキー練習場となる。
勿論、所有者は居たであろうが借用のいきさつは分からない。私は其のあたりがてっきり「臥龍が丘」と長年思い込んでいた。この度、多くの資料を見ることによって朧げながら実態が分かったような気がした。
おそらく「臥龍が丘」は臥龍山の峰続きではなかろうか

スキー場の尾根に登ると反対側左下に小さな小屋みたいなものが見えた。「あれは何？」と上級生に訊くと、「あれは軍隊の弾薬庫だから近づくな」と言いストックで右下を指しながら、あの辺が日枝神社、その先はお寺ばかりだと、教えてくれた。ところが後で地図を見ると実は火葬場であった。昔、この辺は焔硝蔵と呼ばれていたので必ずしも場違いの答でもないと思った。

校舎の東方に鬱蒼とした松林の丘がある。赤色の幹が真っ直ぐに伸びて周りの緑に映えた美しい丘である。

通称「あか山」である。地蔵山～太子山のすそ山かも知れぬが学生時代は、そう呼んでいた。昔、校長排斥のストライキがあり、先輩達が立て篭った山とも聞いている。「赭山」か「赤山」か、判然としないが東京には旧制中学校卒業生有志による「赤山会」なる組織があり毎年春秋、会合を開き交流・親睦を図っていることはご存知の通りである。

話を戻すが「臥龍が丘」の由来は結局究明できなかったが、しかし、これで良いと思う。いつまでもこの名を大切にして守ってゆかなければならぬ。「幻の丘」であっても良いではないか。寝ていてはならぬ。寝てはいられない時代なのである。

さて最後となったが今回、会報第３２号を発刊するに当り、村松、東京を問わず同窓の皆さんが貴重な時間を割いて連絡を取り合い、しかも短時間の内に資料をお寄せ下されたことに感謝しなければならない。

いずれ　同様な事がらで、ご協力を頂く時があるかも知れない。お礼とともに、お願いをして筆を擱く。

ご協力頂いた方々。

在村松	村松町史編纂委員	森山　宥	さん
〃	地名研究会	佐藤　栄策	さん
〃	郷土史研究家	伊藤　正	さん
〃	高校７回卒	佐藤　静子	さん
在東京	東京同窓会常任幹事	武藤　三郎	さん
〃	〃	斎藤　和男	さん
〃	〃	澤出　赳允	さん
〃	〃	深見　洋子	さん

なお　本稿読後、間違い、追加事項等について、ご意見感想等あれば是非、ご連絡の程お願い致しておきたい。
いずれ、応援歌の作詞、作曲者についても調べてみたいと考えている。何とぞご協力を。旧校歌（現応援歌）は創立当時の浮田辰平教頭の作詞である。

ちょっと・いい話

佐伯会長は冬でも扇子を持ち歩いている。
別に暑くもないのに会議などの折、パタパタやっておられる。子細に観察してみるとその時は必ず煙草を吸っている。煙草の煙りが周りの人に迷惑をかけないようにとの気配りか。煙草の煙りは天井に向かって上っていくが、どちらにしても室内に煙りがあるのは当たり前のこと、いっその事、その時間、煙草を吸わなければよいのに思うが、それは無理か。

（洋）

ちょっと・いい話

１０月１日に都交通局のシルバーパスの更新があり、交付を受けた。その際「今度から料金箱を通してください」と言われた。「そんな事をするとバスの乗車口が混雑して、後から乗る人達の迷惑になるのでないか」と言った。事実、私の住む地区は老人の利用者が多く、他の地区に比べ乗降に時間がかかっているようである。すると「利用者の数をチエックするためです」との答え。道理だなと思った。

半月ぐらい経つと、バスの運転者から「今まで通り、ただ見せるだけで結構です」と言われた。
今度はヤッパリだなと思った。バスの運転者か乗客からの苦情が上の方へ届いたらしい。対応が早かった。さすがは石原知事サンだなと思った、もっとも本人は知ってか知らずかであるが。良い事は迅速果断に実行することである。年寄りの人達は胸の中でさぞ喜んでいるであろう。

（伯）

新制松高発足当時の思い出

剣持　常泰（高３回卒）

母校松高が平成１３年で、創立９０周年を迎えた。私どもが卒業した昭和２６年が４０周年だったから、あれから丁度５０年経ったのかと思うと感慨新たである。（私たちはその年の春、卒業してしまったので、４０周年事業には参加出来なかったが）
あの頃を偲んで感慨の一端を述べて見たい。

私どもは旧制村松中学に在学して居る間に、新制松高生に変わったという数少ない特色ある存在である。旧制に入学した昭和２０年の夏、あの終戦に遭遇し、敗戦国として未曾有の大混乱と物資欠乏の困窮の中で学ぶという苦しくも思い出多い中学時代を過ごした。加えて２１年にはあの「村松の大火」があり町の大半が荒廃したので、その苦難さに追い打ちがかけられた。

私はその年の秋、旧制六日町中学校長から本高へ転任して来た父・常昌に従って転入したのであるが、大火後のため住む家なく当時の寄宿舎を住居に、他の先生方数家族の方々と共に過ごした事が思い出される。

当時は弁当も満足に持てないような酷しい時代であった。軍隊から払い下げのナッパ服や背嚢に、足駄という姿が大方の標準スタイルだったが、心は豊かで苦しい中にも質実剛健の校風とともに勉強に勤しみ、また文化祭や運動会などの学校行事にも熱心に取り組むなど、学校生活は豊に築いたと実感している。

昭和２２年、画期的な学制改革があり旧制松中は新制松高となり、私どもはその併設中学の３年生という事になった。そして旧制中学４年に当たる昭和２３年から、高校１年生という事になったが、先生方や学友が変わった訳ではないので、あまり実感はなかった。教科書などがそれなりに変わって来たので次第に高校生になったという自覚が湧いて来たように思う。

昭和２４年、高２を迎えた年から更に画期的な事が起こった。村松高女が本校と統合され男女共学となった事と、選択教科制度の実施など教育課程の大幅な改革である。丁度、年頃になった私どもにとって、これまた年頃の女生徒が来て一緒に学ぶなどとは、まさに晴天の霹靂で不安と期待で複雑な思いであった。

一方、ホームルームという耳新たな学級生活や、選択教科になるとそれぞれ選択した教室へ分散移動して（国語・体育以外）学ぶという学習方式実現にも大変面食らったものである。

しかし、やがて軌道に乗り慣れると、たいへん適切かつ合理的なシステムだと実感して来た。これは、何処も皆このようになったのかと思っていたが、必ずしも全国一律であった訳ではなく、新制松高の文字通り進取的、先導的な試みであったという。

先生方も、みな熱心で個性豊な方々であった。紅一点だった音楽の山家先生のほかに男女共学制になって沢山の女性の先生も来任され指導陣も多彩になった。女子が来て混声合唱も出来るようになるなど、文化祭・運動会等の学校行事も面目を一新した。

共学と言っても私どもの時代は、女子のみ１組別個に編成されるという、いわば「併学」であったが、選択教科の時間やクラブ活動、学校行事等になると文字通り一緒になるので、これが大きな魅力ではなかったろうか。新しい制度とシステムの中で丁度新雪をかき分けるように、先生方も生徒も共に未知の世界を模索し探るかたちで、必死になって取り組んだのだと思い出している。

その結果、勉学は言うに及ばず文化祭等の各種学校行事の充実をはじめ、陸上や野球部等の県大会での善戦が実現した。そして進学は過半数が新潟大をはじめ各種の大学に合格したり、就職も大勢が堅実な職場に進むなど大きな成果として現れたのである。

あれから早や５０年、冒頭に述べた９０周年を迎えた。これを機に母校の新たなる充実と発展を祈るものである。

…以上…

創立九十周年に思う

野球部ＯＢ・沢出　赳允（高６）

私達が一年生の時、創立４０周年記念式典が行われた。故郷をはなれて４８年、母校の栄光が脳裏に焼きついたまゝ松高の歴史と伝統の重みを感じながら過ごしてきた。

平成１１年の夏、甲子園出場校の中には、創立１００周年、１２０周年と超歴史のある学校が多かった。創立１００周年にして夏の甲子園へ初出場をはたした山口県立岩国高はじめ多くの学校で長い間、あきらめもせず、目標に向かって切磋琢磨した結果であり敬意を表したい。

松高も創立１００周年まであと１０年ある。
私達が三年生の昭和２８年夏、野球部は新潟県大会で優勝した。当時は全国大会への出場は信越地区で１校だったため甲子園へは行けなかった。

後に各県大会優勝校が甲子園へ出場する事になった。県大会で優勝経験のある“松高野球部も甲子園出場が近いのではないか”と思いつゝ、何時の間にか超長い歳月が過ぎてしまった。生存中に一度でいいから甲子園で後輩の勇姿を見たいと思っている。

懐かしき・あだ名

渡辺　八郎（高３）

学校の先生には“あだ名”がつきものである。諸先輩が付けた先生のあだ名は、誰彼となく言い伝えられて行くものである。風貌や動作からして、まさにピッタリのあだ名には感心させられたものである。

私が旧制中学に入学したのは昭和２０年、終戦の年である。当時の先生方は国防色（カーキ色）の国民服を着ていた。呼び方も「○○教官」で近寄りがたい存在であった。しかし伝統ある“あだ名”を重ね合わせると平和な背広姿の師であり先生に見えた。

校長は蛙の王様で「がま」、教頭の威風堂々と歩く様に「タンク」、骨張った風貌で「ガンジー」、腕まくりの大嫌いだった数学の「タンジェント」、その他、「ひらめ」「ほしかぶ」「どろん」「らっきょう」「らいぎょ」に「オットー」など多彩であった。愛嬌のあるところでは「ぽんちゃ」「まんちゃ」「ぐんちゃ」など、それぞれに曰く因縁があったのだろうが、それなりに“あだ名”に恥じない「立派な個性？」の持ち主であった。

中でも、時代屋の「どろん」先生、独り意気込んで授業をしていた、あの顎ひげの風貌は小説「坊っちゃん」の仲間に入れてほしいくらいである。飄々と且つ茫洋とした風采の「まんちゃ」などは、語感と語呂がマッチした例えようのない妙名であろうか。その人だけに与えられた語源のない絶品である。

終戦時からこの方、先生には“あだ名”が少ないとか聞くが、師弟の溝がなくなり師の存在が薄らいできたのか、先生に個性がなくなったのか寂しいかぎりである。

当時の、わが旧制村松中学の先生のあだ名は、聡明なる生徒の五感が命名した冠たる勲章でもある。あらためて先輩に敬意を表する次第である。

若いうちは「仇名」も結構。長じて「字（あざな）」も結構。人生ささやかな存在を認めてくれる「あだな」一つくらいはあってもいいのでは……。

慈光寺

おりたてば　そこはふるさと
たずぬれば　そこは慈光寺
たくましき　老杉の道
ひとすじの　老杉の道
谷水の　清らに流れ
わが春愁　を　閑かに満たす

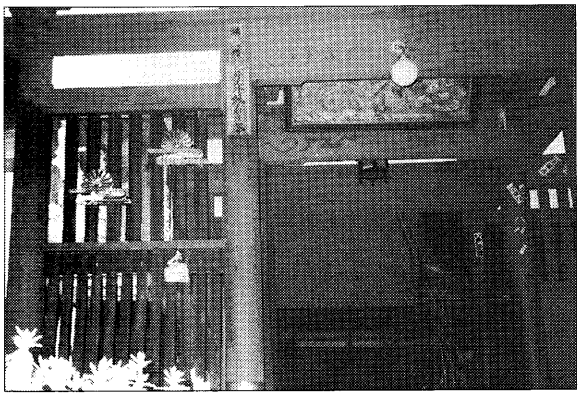
果てしなき　みちをもとめて
悟りへの　みちをもとめて
ひたすらに　畳に座る
筧水　いかに聞きしか
至りしや　豁然の境
その歓びに　触るる術なし

苔むしし　石のほとけよ
ものいわぬ　石のほとけよ
悲しみは　いのちの証し
苦しさは　だいじな炎
ひむがしに　雲の流れて
ふるさとの山　茜に染まる

問う

このわれは　いずこから来しや
このわれは　いずこに行くや
この古刹　声はなけれど
かすかにも　雪をふむ音
とおざかる　雪をふむ音
凡凡の　みちをあゆみて
翁がひとり　眼花を嘆く

高三回（昭和26年卒）
土田　猛



越後禅門の名刹・慈光寺

石川雄二氏（高2）の個展盛会裡に終わる

東京同窓会会報３０号及び３１号で、ご案内いたしました、一水会会友、石川雄二氏（高２）の油彩個展が、９月１８日から９月２３日の６日間、東京八重洲・三興画廊で開催され大盛会のうちに幕を閉じました。

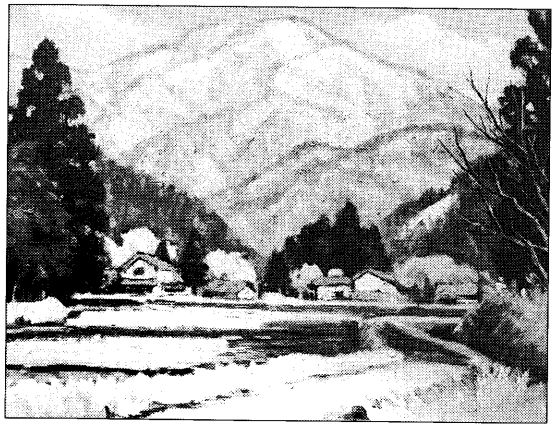
石川氏の初の個展が東京で開かれ、これ程好評で来場された方々から高い評価を得ましたことは、本人は勿論のこと世話人一同感激にたえません。

展示は、２号から１００号まで３４点、阿賀野川・白山・菅名岳・三川温泉郷や、田園のはで木・魚沼の緑・暖かい雪模様など郷土の風物詩をかなで、懐かしさで心に安らぎを与えてくれるものでした。

個展の成功は、石川氏の「自然の美」に対する自己主張とそれを表現する才能に他ならないものですが、また同窓の皆様、同期の諸兄姉、そして一般の方々のご支援の賜物と御礼申しあげます。特に、東京同窓会会長の、佐伯益一氏（旧中２７）、武藤三郎（旧中２６）大先輩ご夫妻、沢出赳允（高６）幹事等々、多数の人達のご来場をいただき感激一汐でした。

石川氏は更に数段の冴えを重ねて、いつの日か再び挑戦したいと情熱を燃やしております。村松高校同窓の諸兄姉の中に様々な分野で才能をお持ちの方が大勢おられることですから、この様なチャンスと場を作り“村松高校の文化ここにあり”と大いに意気を揚げていきたいものです。最後に同窓の皆様に重ねてお礼申しあげます。

世話人代表・ 杵渕　政海（高２回卒）



…白山浅春…

雪止む…第６３回一水会展（２００１）

赤松の道Ｆ６号

奥入瀬Ｆ10号

…個展のお知らせ…

小出博三氏（高8）油絵展

・会場　東京交通会館Ｂ１（シルバーサロンＡ）
千代田区有楽町２－１０－１
電話　03-3215-3826
ＪＲ有楽町駅・京橋口正面

・期間　２００２年3月3日（日）～9日（土）
ＡＭ１１時～ＰＭ７：００
最終日はＰＭ５：００まで

・お問合わせ電話　047-448-9632（小出）

◎　左記の油絵は、小出氏作品

村松・地名考

伊藤　正（中３２回卒）

村松では「番地」「町内番号」「町名」の三通りの住居表示がある。いちばん分かり易くて一般に使われている町名は通称であって、公式な町内名として取り扱われていない。

困るのは郵便屋さん。町の大通りに沿って駅前から学校町と春日のはずれまで、更に、新町、深沢、愛宕原、番坂と町の大部分が甲番地。

乙番地は、大通りの甲番地をはさんで東西の二区画。丙番地は学校町の甲番地の中に、６～７箇所にわたって点在している。

このような区分に当然のことながら合理化の声があがり、新しい町内名を付ける試みがなされた。

城下町ということで、藩政時代の町名をもとにした案が示されたが、線の引き方が悪いとか、必ずしも歴史をふまえていないとか、議論百出。村松の新しい町名もどうやら暗礁に乗り上げ動きがつかなくなったらしい。

先に述べたように、甲番地は旧町の乙番地を除くほぼ全域にわたる。乙番地だけが明確な二つのブロックにまとまっていると言えるのである。

では乙番地の素性は何か。一般に西丁といわれている長柄町・御徒士町・本堂・片町。滝谷川（城川）を隔てて、仲丁・新道・馬場丁・泉町など大手門、搦手門の内側（丸の内・本丁）。東丁といわれる根木町・宝町などが乙番地で、江戸時代の町絵図を調べると、住人は名字を持っている。つまり、乙番地は武士の居住区であった。

ちなみに江戸時代の城下町では武士の居住区は「丁」、町人の居住区は「町」の字を用いている例が多い。

では、なぜ武士の居住区だけを乙番地とする必要があったのか。この事も町史に書いてないが、大漢和辞典を編著した諸橋轍次博士に漢字の手ほどきをした奥畑義平の著した、村松の歴史「松城志」下巻の明治五年の項に「廃藩庁。置新潟県出張所。而士族與平民異治。児嶋泉為士族戸長（略）」とあり、士族と平民が別な行政の下に置かれたことがわかる。

児嶋泉が士族戸長になったのであれば、平民の戸長もいた筈であるが、児嶋泉の名も平民戸長の名も書かれていない。しかし、甲乙の番地の制定はこの辺りの行政上の必要に関わるものと推測できる。

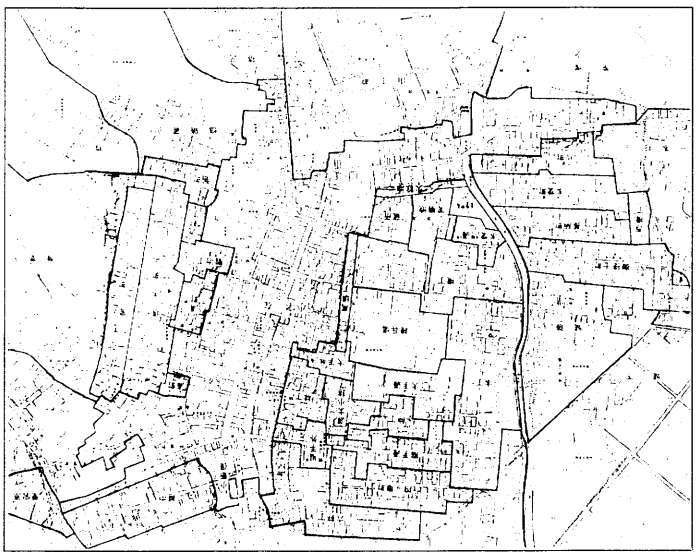
明治９年の項には大小区制が施行され、町が二つの大区になったことと、正副の大区長の名が記録されているものの、具体的な区割りがどうであったかは定かでない。

明治１２年郡区制の施行のとき、町は三つに分割され西丁は城町に、丸の内は上町に、東丁は下町に含まれることになり、それぞれに町会を持つことになる。

猫の額ほどの町が、三つに別れたのでは大変で、明治１６年に合併して一つの「村松」になる。甲乙は明治５年から１２年の間に決まったものと思われる。

丙番地については、町から離れたいくつかの小集落が軍隊ができたことによって、新しく開かれた営所通りの甲番地の拡張によって、その中に取り込まれたものと考えられるが、詳しいデーターがないので、その由来については触れることができない。　　以上

（付記）図は「村松お城の会」会長、佐藤吉宏氏（佐藤住建社長）が同社の不動産広告の裏面に、村松の小字名として付記したものである。



…表紙について…

昭和１２年３月１日発行の新潟県立村松中學校・校友會会報、「臥龍」２４号の表紙

新潟県立村松中學校校友會の発会式は明治４４年５月９日に行われた。

会報第一号は明治４５年３月に発行されたが、会報名がなく昭和６年にいたって漸く会報名がほしいとの要望が多くなり、生徒よりその会報名を募集したところ「松城」と「臥龍」の二点が多く、最も生徒の人気を獲得した「臥龍」が最終決定となったといわれている。

村松町在住　佐藤　栄策氏（旧中２６）調べ

『検証、酒談義』

酒・酒・さけ・さけ

佐伯　益一（旧中２７回卒）

酒は無理に注ぐべきでないし、また注がれた酒は残すべきではないというのが私の信条である。

県人会や郷人会等の集まりで肩をたたかれ「やあ～、しばらく。お元気ですか」と酒やビールを注がれる。満杯のコップに一口、口をつけてから注いで頂く、そして一口軽く飲んでからコップを卓上に戻す。これがお酌された時の礼儀であると私は心得ている。

なにしろ呑兵衛の看板を背負っている私の事とて、なかなか応対に忙しく箸を持つ暇も無いくらい。しかし冗談を交わしながらも楽しく飲めるのは嬉しい限りである。だが、宴が終わってからテーブルの上を見ると、なんと酒やビール、水割りの飲み残しの多いこと。中にはまだ半分くらい残っているビール瓶も多くある。そして会場の従業員が大きなポリバケツを持って集めている。「あ～、勿体ないなあ、然も半分は税金なのに」と思う。店の売上に協力しているのか？、果たして各人は自宅での晩酌もそのように残すのであろうか？と、つい考え込んでしまう。

嘗て“きりん山酒造”の先代社長・斉藤徳男氏と酒席を共にしたことがある。氏はお膳の上にこぼれた酒を、指先ですくい、手の平や甲に擦り込んでおられるのを見た。僅かな酒でも大切にする、さすがは造り酒屋の親父さんだなぁ、と感心したことがあった。

酒は肌にも良いし艶を出す。だから常に大酒を飲む相撲取りは、荒い力勝負の割りには肌に輝きもあり艶もあるのだとこれは後で知った。私も酒は好きな方だが別に内臓は悪くない。齢の割りに若く見られるのは、そのせいかなとも自賛している。「皮膚は内臓の鏡」と言われているが、その所以もここにあるのであろう。

私はビールだけ飲んでいると、なんだか物足りないし酒だけだとのどが渇く。従って交互にチャンポンで飲むようになる。酒は熱燗を好む。チャンポンは悪酔いをするとの説もあるが、これは根拠が無い。胃の中で違う種類の酒が混り合っても特別な化学変化はおきないという。

悪酔いや二日酔いは量を飲み過ぎるからであり、量によって爽快期、ほろ酔い期、酔っ払い期、酩酊期、泥酔期と状態が変わっていくので精々三番目の酔っ払い期で止めておくべきで、この時は感情不安定となり、感覚が鈍くなる。酩酊期になると千鳥足となり、それが進むとそれに輪をかけた万鳥足、即ち泥酔となり、もう何とも仕様がなくなる。別称、大虎である。虎とは酒飲みのこと。酒の別名「ササ」に虎から、または寅の刻（午前四時）まで飲むことに由来している。泥酔の泥は中国の南方の海に棲むという空想上の虫の名で、この虫は骨がなく、水の中では生き生きしているが水が無くなるとフニャフニャになってしまう。水を失ったこの虫の様子が人間が酔い潰れた姿と似ているので「泥酔」という言葉ができた。この言葉は随分古く、約千二百年前、唐時代の詩人、杜甫も「酔いて泥の如し」といっていると以前ある本で読んだ。私の経験からいうと「酔っ払っていたので全然分からなかった」と言うのは嘘。少なくとも半分は分かっていたか、あとで思い出すかである。「知らなかった」とは言わせない。

人と飲む時「まず一献」と注ぎ合うのは当然としても、あとは程々に手酌でやるのが一番良い。

ここで私の酒歴について、ちょっと触れておく。
多分、小学校五、六年の頃か、従兄弟と二人で酒の当てっこをしたことがある。サイダーと酒をそれぞれコップに入れ、サイダーの泡が消えるのを待ちデンスケ賭博よろしくコップを左右に数回置き換え、間違えた方が飲むことになり私が酒になった。一息に喉へ流し込んだが、なんとも言えぬ微妙な味であった。然もそのあとケロリとしていた。これが私と酒の出会いである。父親が土建業を経営していたので酒類は常に台所にあった。以後、私は時々「盗み酒」を試みるようになった。

ビールを飲んだのは、それより大分あとのこと。栓は指先で簡単に開いたが一口飲んだら、とても苦かった。「なんだ、こんな味か」と残りは捨ててしまったが、なんと実は、これは家人が料理か何かに使うつもりでとっておいた氣の抜けたビールであった。

進学で上京後、友人三人位と初めて上野駅前の京成聚楽で生ビールを飲んだ。酒の統制が始まった頃で、客は長く列をなしており我々も学帽を隠して並んだが、一人二杯の制限であり、一杯は今の小ジョッキ位の大きさだったが「うまい！」と感じた。飲み終わると仲間が「おい走ろう」と言う。「なんだ逃げるのか」と訊くと「いや違う」と。訳の分からぬまゝに西郷さんの銅像の所まで走ったが、酔いが一度に全身を回った。成る程、こういう事かと理解した。それ以来すっかりビールと仲良くなった。

戦後、土木工事の現場監督をしていた時「今日はコンクリ打ちの小間割りだ」と指示、仕事が早めに終わった。「おい、焼酎を買ってこい」とカネを渡し使いを走らせる。容器が無いものだから皆、空になった弁当箱や、おかず入れで飲むが「はい、親方から」と深さ５センチもある一番弁当になみなみと注がれたのには閉口した。従って回し飲みとなる。肴はスルメ、女性達も飲む。日が経つと彼女達は気を利かして、昼弁当のおかずを多めに

持ってくるようになり、少し残しておいて酒の肴にと皆に配る。「トリスを飲んでハワイへ行こう」なんていわれていた頃で、これで焼酎を覚えた。

東京へ出てきて初めて焼酎のお湯割りや、ウィスキーの水割りがあるのを知った。二次会などに誘われてクラブやスナックに行くと水割りが出る。コップが半分位になるとウィスキーをちょっぴり入れて、やたらに水や氷を入れる。しまいに「オレは水を飲みに来たんでねえ！そのまゝ持ってこい」と喚き、店の女性達を呆れさせる。

田舎にいた時、ウィスキーや焼酎はそのまゝ飲むものと思っていた。

旧制中学の時、軍事教練の一環として、佐渡行軍があった。背嚢を背負い三八式銃を担いでの徒歩行軍で、この三八式銃は明治三十八年に制定され、この頃の年代まで製作使用されたものであるから、長年の手入れ等で油が滲み込み我々の肩には随分重かった。

この銃が先の大戦でも使われていたとは驚くほかはない。

「お前は佐渡が初めてだろうから船に酔った時には、これを飲め」と料理番をしていた叔父が別の水筒に酒を詰め持たせてくれた。海は少し時化ていた。引率の先生の一人、陸軍少尉の教官ドノが青い顔をして壁に背を当て大あぐらをかいてへたばっていたのを丁度、通りかゝった私が「先生どうしました？」と訊くと「うん、少し船に酔ったらしい」との答え。「薬を持っていますが」「薬とはなんだ？」耳に口を寄せて「実は酒です」「なに〜酒？、直ぐ持って来い」私は怒鳴られるのを覚悟で恐るおそる差し出した。ごくん・ゴクンと二〜三口飲んで「して、なんで？」と。私は、しかじか、かくのごとき訳でと説明した。「うん、分かった。他には言うな、これはワシが預かっておく」と仕舞い込んでしまった。帰りになって「ご苦労であった」と言い水筒を返してくれたが、中は空っぽ。しかし、匂いが飛ばないようにとの心配りか、中は水できれいに洗ってあった。以後、学校で偶々目が合うとニャリとしていた。

半年後、私は卒業となる。へたをすると退学にもなりかねない危うくも、懐かしい思い出である。

酒の思い出はまだあるが、ちょっとのつもりが、つい筆が滑り過ぎたようだ。ここらで本来の酒の講釈に戻らなければなるまい。

「新潟の酒は、おいしいですね」と、よく人に言われるが、天の邪鬼性の私は、全国に何千何百の蔵元があるが、なんで不味い酒を出す蔵元があろうか。何処の酒でもみんな旨いんだと、つい反論したくなってしまう。しかし「特に新潟の酒は」とと言われると話はまた違ってくる。

新潟県には市部２０市、郡部で５６の町、３５の村、合計１１１の市町村があるが、この内、４８の市町村に、１０３の酒造会社がある。一つの酒蔵で２〜３種類の酒を造っている所もあり、従って県下では、約２００以上の銘柄の酒が造られていることになるが、実数についてはよく知らない。

因みに全国で、酒造会社は約２４００社、銘柄は主なるもので約５０００種以上あることから、新潟県の酒の生産量が群を抜いていることが理解できる。

新潟県の酒が特にうまいと言われるのは『水』『米』『技』の三要素が、うまく調和しているからで、いわゆる「淡麗辛口」なる酒が出来上がる。「淡麗」とは軽くサッパリとの意で、最近ビールにもこの呼び名が付いているのもあるが、これは新潟の酒の方が元祖ではないかと考える。

「水」には「硬水」と「軟水」があり、カリュウムやマグネシュウムの多い方が「硬水」、少ない方が「軟水」で、新潟の酒は｛軟水｝から造られる。そのため口あたりの柔らかい酒が出来あがると聞いた。ご承知の通り、新潟は豪雪地帯、降り積もった雪水が長い期間に山に滲み込み湧き水となって土壌の良さと重なり、うまい米を育てる。新潟の水は、山と雪の恵みといえる。新潟の、「米」については、もはや言う必要はない。ただ、酒造用として品種改良された代表的な米・五百万石・一本〆・たかね錦・などがあることを知っておく必要がある。これで、水と米が揃った。あとは、如何にしてうまい酒を造るかである。即ち技術である。技術だけだったらロボットでも出来る。心が込もっていなければ、うまい酒は出来ぬ。これを『技』と呼ぶ。

高志（こし）の国（越後）に関わる奴奈川姫と大国主命との話から新潟の酒は「もてなす心」から生まれたと古事記に書いてある。

酒を造る職人のトップを「杜氏」と呼ぶが、「越後杜氏」の名はあまりにも有名。従って、その『技』一字のために修行は極めて厳しく、つらいものと聞いている。全国で唯ひとつ、清酒のための県立醸造試験場を持ち、県立高校で醸造科があるのは吉川高校だけというのも、さすが新潟県ならでは、と感じている次第。

さてそこで、蔵元で造られる清酒の種類や区別についてであるが、嘗ては級別制度による特級、一級、二級などの清酒や、合成酒などがあったが、長年、酒と仲良く付き合ってきたつもりの私でも、現在の吟醸酒、純米酒、本醸造酒、生酒となってくると、その区別がサッパリ分からない。従って、いま手元にある酒のパンフレットを見ながら書くこととした。

酒の原料として、いずれも「米」「米こうじ」「水」を使用することには変わりがないが、これに醸造用アルコールを加えるか否かで特定名称が変わってくる。

醸造用アルコールを加えない酒は……①純米酒（精米歩合70％以下）②純米吟醸酒（同60％以下）③純米大吟醸酒（同50％以下）④特別純米酒（同60％以下または特別な製造方法による、説明表示を要する）

醸造用アルコールを加えた酒は……
①吟醸酒（精米歩合60%以下）　②大吟醸酒（同50%以下）　③本醸造酒（同70%以下）　④特別本醸造酒（同60%以下または特別な製造方法による、説明表示を要する）などがある。

このほか製造上の特徴から……
①生酒（製成後一切加熱処理しない）　②生貯蔵酒（出荷の際に加熱処理する）などがあり、程度の差こそあれ香味、色沢が何れも良好で夫れぞれ特色があるのは言うまでもない。

醸造用アルコールとは、石油などから作られる合成アルコールとは違い、澱粉や糖質を原料とし、これを酵母で発酵させてから蒸留して作ったもので、使用した白米重量の10%を超こえてはならないとの制限がある。

また精米歩合とは玄米 100に対する磨き落とした残り分で、因みに我々が食べる飯用米の場合は約90%である。

同一の銘柄や種別の日本酒ででも、品質が優れている印象を与える用語として「極上」「特撰」「別撰」「デラックス」等の表示のものがあるが、原料や製造方法などの違いが明確なものだけにされているとのこと。但しこれらの用語は、吟醸酒、純米酒、本醸造酒に合わせて表示できぬことを知ったし、一升瓶の包装紙に印刷されていても、瓶にそのラベルが貼られていないのを見て、成る程なと思った。

誘われて幾度か「利き酒の会」に行ったことがあるが私にはあまり興味も関心もない。ただ、其処で「きき酒用」の小さな容器の底についている、青色の「蛇の目模様」のしるしの意味、目的を知ることができた。青色の所が酒の透明度、白い所が酒の色合いを判断し易くするものだそうだ。

また、酒には製造後、期間によって「新酒」「古酒」の別がある。造りたての酒が「新酒」それをひと夏越して熟成させたものが普段飲む酒。一年以上貯蔵したものを「古酒」という。

先般、十年間冷凍庫に保存した酒を見せてもらったが、シャーベット状になっていた。話によれば、酒の味はしないが、うまい。だが、酔い心地は誠によろしいという。夏場であったので、すぐ元の場へ戻されてしまった。
銘柄を訊くのを忘れたが、さぞ値段は高いだろうと思った。凍結酒という。アルコールは凍らない。

これも最近の話だが、酒びんのふたを取ったあと、残りの酒が酸化しないように、即ち酒の味が変わらぬように「窒素」を入れると良いと聞いた。「窒素」を入れた小さなスプレー式のボンベがあるとの事だが、窒素は酸素よりも軽いし、やりかたも分からぬ。まだ見たこともない。

若い時、「酒は噛みながら飲め」と年上の人から言われたことがある。「なんだ、液体が噛めるものか。それとも俺の酒だから噛みしめて飲めとでも言うのか？」と思ったが後日、酒を飲む時には必ず食べ物を一緒に摂れと教えてくれたのだなと理解した。

私は今まであまり食べない方であったが、最近は食べながら飲むようになった。肴はイワシの丸干し一匹と長ねぎ１本で充分である。食べ物は各人各様であるので、ここでは取りあげないが、とにも角にも何か食べながら飲むのが一番良い。ヤケ酒といって何も食べずに煽るのは悪酔いの元、かと言ってバタピーをボリボリやりながらのヤケ酒では絵にもならない。まして心のウサの捨て所でもない。酒は楽しく笑いながら飲んでこそ初めて「百薬の長」の意味が生きてくる。だから冒頭に書いた「酒は無理に注ぐべきでない」ということに相成る。

宴会の席で銚子と盃を持って蟹の横這い宜しく、次々とお酌に来られるのにも閉口する。盃を返さず、お膳の下に置いたまゝにし相手を困らせたことが度々あった。凡そ二十個ぐらい溜っていたか。時々「お流れ頂だい」や「おこぼれ頂だい」果ては「おもらし頂だい」などと言って皆を笑わせた。

返杯と称して盃を返すが、昔の料理屋には必らず「盃洗」なる容器があって水で洗って盃を返す。「なんだ水くさい」と言われたものだが今は廃れた。盃の交換もなくなった。これは、衛生上の観点からも良いことである。

この頃何処へ行っても「酒は二十才になってから」また「煙草は…」の看板、表示が目立つ。いったい如何なる故で？と調べてみた。人間の身体は大体二十才までが成長期であって、二十才を過ぎると脳細胞が次第に死滅していくという。（欧米では女子、十七、八才頃から老化が始まると聞いている）人間には、古い脳（本能、欲望）＝本音と、新しい脳（常識、倫理、道徳）＝建前の、二つがある。酒は先ず「新しい脳」を選択的に麻酔させるので「本音」が出てくる。通常、人間は頭の中で「本音」と「建前」が喧嘩をしている状態であるので、ストレスもそこから生じてくる。酒によって「建前」が麻痺し、ストレスが解消し「本音」が出てくるというわけである。成長期における飲酒が脳細胞の死滅を早めさせ身体の発育を阻害し、また理性を失わせ、犯罪に結びつき易いことを考えれば、一定の年齢を定め法律でもって規制することは当然のことであろう。本音が自由奔放に働いたら大変なことになる。

我が国では「未成年者飲酒禁止法」によって未成年者の飲酒は禁止されている。法律では、民法で二十才に満たない者を「未成年者」という。

この法律は大正11年（1922）に施行されて、昭和23年（1948）に手直しされて現在に至っているが、この法律が今日、確実に守られているとは思えない。何か再検討の余地があるのではないかと考えるが、現に私自身が前述の通りであるので、大きな声では言えない。

昭和１９年春、繰上げ兵隊検査が無事に終り、その晩、仲間たちと料亭でドンチャン大騒ぎをしたことを、いま懐かしく思い出す。同時に酒好きであった父の納棺の時、徳利と盃が一緒に納められたことが瞼に浮かんでくる。

さてここで、頭の体操を一つ。

『直径八尺の酒造用ホーロータンクの酒を、毎日三合ずつ飲み続けて一寸減らすには幾日位かかるか？』である。ちょっと計算してみてほしい。分からぬ時は、清酒一升で教えてあげる。

最後になったが、この稿を起こすにあたり、麒麟山酒造㈱社長・新潟県酒造組合長、斉藤吉平氏から送って頂いた資料が随分と役に立った。

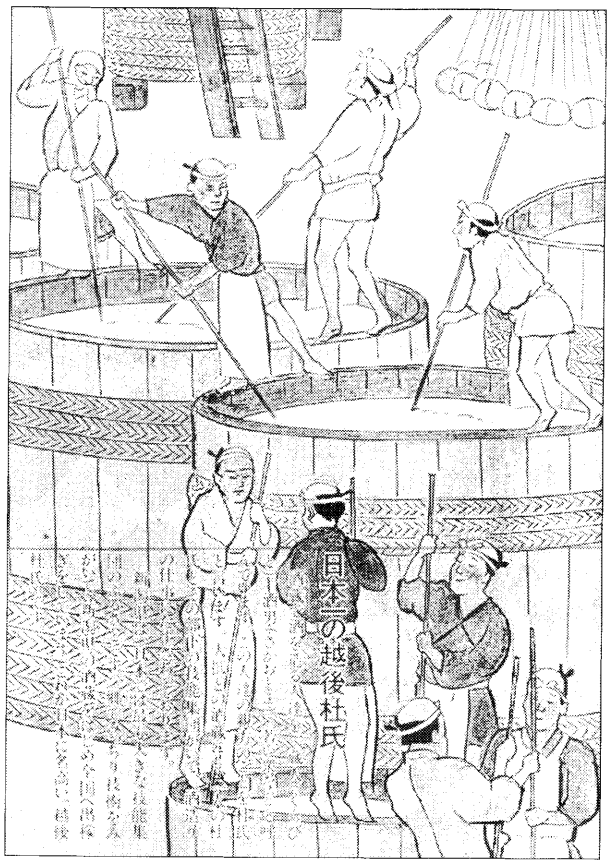
厚くお礼申し上げる。

悠々、酒の美味しい時季となった。酒友各位には心して飲まれるよう、お訴え申し上げ筆を擱く。

（東京同窓会・会長）

※　八月二十九日付、朝日新聞夕刊は

『新潟県教委は来年度、県立吉川高校・醸造科の募集を停止する方針を固めた。普通科への進学希望者が増え、定員割れが続いているためで、現在の一年生が卒業する２００４年３月で廃止され、４０年以上の歴史に幕が閉じられることになった』と報じていた。



第二の人生

小出　博三（高８）

子供の頃から好きだった、野球と絵を書く事、勉強は二の次、小学校では斉藤光孝先生、高校では富永一生先生の元で美術部に席をおいた。部員の中には美大を目ざす人もいて私もその気になっていた。

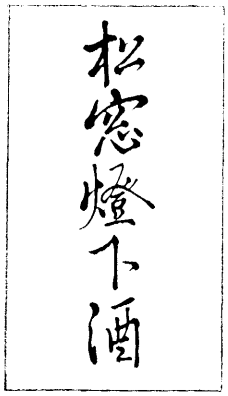
ある時、父に話した所「とんでもない」と大反対、東京に出る条件は絵の学校以外の勉強をする事と云われ、しぶしぶ花の都・東京に出たさに取引をした。絵に少しでも近い建築の学校に決めた。

卒業して会社に入ると作業服で職人と渡り合う建設現場、あつい、さむい、きたない、危険な職場に何とかなれて来たと思ったら、定年・還暦。何か好きな事をと三日考えたら、無性に絵が書きたくなった。

油絵の道具一式買い込みキャンバスに向かった。高校時代の美術の情熱がよみがえり爆発した。絵筆もなめらかにキャンバスをなめている。公募展にも出品し入選、落選、入賞あり、自分のレベルが見えてきた。

３年間で１００枚のキャンバスが色付き、個展を開いた。松高８回生の人達や、会社人間の３５年間にお付き合いした方々に愛されて以後、個展を楽しんでいる。

２００２年３月は４回目となり、いつまで元気で画けるか、体力との勝負でもある。



ちょっと・変な話

米国の世界貿易センターに対するテロ攻撃の首謀者と言われるアフガンのビン・ラデインに何故か一部のマスコミ・報道紙を除き大半の報道紙はＮＨＫを始めとして　氏をつけて呼んでいる。不思議だ、立派な犯罪者ではないか。昔のヒットラー、ムッソリーニ、また日本のオウム真理教の麻原某などに氏をつけて呼んでいるだろうか？報道関係者の説明を訊いてみたいものである。　（伯）

２００１年・国内の主な出来事

1月　1日・東京地方、晴・最高気温１０．８度
　　8日・成人の日（昨年までは、１５日）
　　１６日・ＫＳＤ、政界汚職事件、自民党の小山参議院議員逮捕
　　２０日・外務省外交機密費、横領発覚
　　２２日・横綱、曙（東関部屋）引退
　　２６日・新大久保駅で三名が電車にひかれ死亡
　　２７日・関東地方、降雪で交通乱れる
　　３０日・２０００年末の失業者、３２０万人
2月　1日・焼津市上空で日航機二機が、異常接近し４１人が重軽傷を負った
　　3日・河口湖が１７年ぶりに全面結氷
　　7日・新潟中央銀行、元頭取ら４人逮捕
　　１０日・えひめ丸、オアフ島沖で、攻撃型原子力潜水艦に衝突され沈没、９名行方不明
　　１８日・森内閣の支持率９％に下落
　　１９日・シーガイア（宮崎リゾート施設）倒産
3月　1日・自民党、村上正邦参議院議員がＫＳＤ事件で逮捕
　　2日・ＪＲ特急「白鳥」廃止
　　・ＮＴＴドコモ「ｉモード」契約数、２千万人突破
　　１１日・外務省元室長、機密費詐欺容疑で逮捕
　　２３日・東京生命、経営破綻
　　・東京地方の桜開化（気象庁発表）
　　２４日・広島県南部、震度６の地震で２名死亡
　　３０日・宗教法人「法の華」破産、解散命令
　　３１日・大阪ＵＳＪ開業（ユニバーサル・スタジオ・ジャパン）
　　・東京臨海線、天王洲まで延伸開業
　　・２０００年の海外旅行者、１７８１万人
　　・東京都内、正午の気温３度…雪舞う
4月　1日・家電リサイクル法施行
　　5日・選抜高校野球で常総学院（茨城）が優勝
　　２６日・小泉連立内閣発足
　　３０日・浅草の路上で女子大生が刺殺される
5月　1日・さいたま市誕生（浦和・大宮の合併）
　　8日・消費者金融「武富士」弘前支店で、ガソリンをまき放火、従業員５人焼死
6月　8日・大阪教育大付属、池田小学校に男が乱入刃物で切り付け死者８人、重軽傷２１人
　　２４日・東京都議会議員選挙・投票率５０％
7月　4日・雪印乳業・食中毒で２１工場操業停止
　　・２０００円札発行、図柄＝沖縄守礼門
　　１３日・史上最高の猛暑で「熱中症」倍増
　　１４日・外務省ハイヤー水増し請求、詐欺発覚
　　・外務省デンバー総領事、公費流用発覚
　　２１日・明石市で花火見物の歩道橋上で将棋倒しになり１０人死亡９０人以上が重軽傷
　　２４日・東京の最低気温２８．７度で、７月としては観測史上最高を記録
　　２９日・参議院議員選挙、投票率５６．４４％
8月　3日・日本の平均寿命、女性８４．６２歳　男性７７．６４歳
　　１３日・小泉首相、靖国神社参拝
　　２２日・高校野球・日大三高が初優勝
9月　1日・午前１時、歌舞伎町の雑居ビル火災
　　6日・外務省課長補佐、ホテル代水増し請求し４千万円強を私的流用、詐欺容疑で逮捕
　　１１日・台風１１号、首都圏を通過、暴風雨
　　・ニューヨーク、ワシントンなどで同時テロ。世界貿易センタービルなど倒壊　死者・行方不明、５１６０人
　　１４日・大手スーパー、マイカル倒産
　　２６日・プロ野球、パ・リーグ「近鉄」優勝
10月　1日・栗東市（滋賀県）誕生
　　6日・プロ野球、セ・リーグ「ヤクルト」優勝
　　8日・米・英軍、アフガニスタン爆撃
　　・イチロー、アメリカン・リーグ首位打者
　　１０日・野依良治・名古屋大学教授が、ノーベル化学賞を受賞
　　・アメリカ各地、炭疽菌被害広がる
　　２５日・ヤクルト、近鉄に４勝１敗で日本一
　　２９日・歌舞伎町６階建ビル火災、２人死亡
11月　1日・東証１部株価、日経平均１万３４７円

（１０月末まで）

広報委員会からのお願い

今回は皆様からの、お便りが少なかったようです。何時でも構いません、近況、ご意　見等お便りをお寄せ下さい。ちょっと思いついた事をハガキやＦＡＸにでも書いて　いただけたら幸いです。
または、寄稿文等も。
原稿の送り先は、事務局、会長ほか幹事宛へお願いいたします。

編集後記

あけましておめでとうございます。旧年中はご協力ありがとうございました本年もよろしくお願いいたします。

会報三十二号・第一回編集会議の二日後、九月十日の午後十時過ぎ米国の同時多発テロが発生、生中継されニューヨーク世界貿易センタービル爆破の生々しい報道にテレビ視聴率は実に二十五・四パーセントを記録したとのことです。

この同時テロで十月八日、米英両国軍がアフガニスタンへ攻撃開始、タリバンとの戦争に突入しました。

国内では、九月一日未明に新宿歌舞伎町の雑居ビルで爆発火災が発生、大勢の死傷者が出た大惨事となりました。

十月二十八日、村松高校創立九十周年記念式典が母校で行われました。関連で多くの方々から、ご寄稿をいただき誠にありがとうございました。

二〇〇二年も厳しい年になりそうです。

年頭にあたり、会員の皆々様の益々の、ご健勝とご多幸をお祈り申しあげます。

広報委員会

平成14年6月　第32号　　表紙の題名・題字は、佐伯益一氏　書（旧中27）

発行人　新潟県立村松高等学校東京同窓会　広報委員会

事務局　〒157-0061　東京世田谷区北鳥山3-18-20（八木又一郎　方）

電話・FAX番号 03-3307-1048